

5

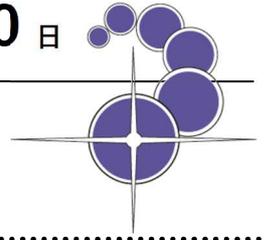
CREATIVE

学年だより

第24号 令和2年9月10日

県立村上中等教育学校（15期生）

● “scientia est potentia”（ペーコン）



先行き不透明の時代、いわゆるVUCAの時代、絶対的な解を見出すことは難しく、最適解というより、最善解を見出すことが求められています。されど、どんなに立派な意見やアイデアについて述べる場面であっても、基本的な理解や知識があることが当然前提であり、それが伴っていなければ、他者から、「表面的だ」とか「基本がなっていない」などと評されることは想像に難くありません。

今皆さんが本校で学んでいることは、仮にその価値が現在わからなくても、事実、世界中で指導されていることであり、むしろ時代の枠を超え、過去から引き継がれている「人類の財産」でもあります。

考えてみれば、本当に学ぶ価値がない知識であれば、とっくに廃れているはずなのです。

そういう意味で、例えば、古代ギリシャの哲学者などの古典が、いまだに文庫や新書で目にできるというのは、とてつもなく素晴らしく、私はロマンすら感じます。

大学を英語では、UNIVERSITYと呼びますが、よく言ったものです。「全体がひとつにまとまったもの」という意味だからです。

私は大学で、「高校生に対する英文速読速解の指導に関する一考察」というテーマで、卒業論文を書きました。高校生が、何が障害で英文が読めないのかを追究しようとしたのです。ただ、英語だけを知っていればよいというものではありません。

まず、調査の対象である「高校生」がどういう特徴があるのかを知る必要があったため、教育心理学の知見が必要でした。

また人がどのように文字を見て、脳で処理しているかを理解する必要があるため、生物の知見も必要でした。

それに日本語と英語の違いを理解するため、国文法の知識も必要でした。ちなみに、英語学には、高校の数学で学ぶ樹形図やシグマ(Σ)がガンガン出てきます。

また、調査用紙を作成する必要があるため、「評価するとはどういうことか」、統計学の知識も必要でした（一番苦勞しました）。

それにデータ処理をする必要があるため、コンピュータを使って複雑な計算をする場面も幾度とありました。

加えて、これまで日本がどんな教育を行ってきたか、その変遷をたどる必要もありました。

また他国がどんな教育を行ってきたか、また、行っているか、地理や世界史の知識も必要でした。

それに調査して下さる高校へ調査の依頼をするために、コミュニケーション能力も必要でした。

数十年前でさえも、高校で学んだ、複数の科目の知識が必要でした。

あれからずいぶん時間がたちました。状況はさらに変化しています。

現在、新しい価値観を生み出す力が求められています。されど、将来、皆さんがともに生活をし、仕事を行う同僚となる人たちと対等に付き合っていくためにも、今、皆さんが学んでいる項目が「マスト」であることには変わりはありません。今、学んでいることがベースとなり、初めて自分ならではの「解」に説得力を持たすことができるのです。

せっかく学んでいるのです。人間ですから苦手分野があるのも当然です。しかし、前向きに、今、学んでいることを生かしてやるぞ、くらの勢いで、

貪欲に知の獲得を目指してください。

期末考査の準備、および、受考での、皆さんの健闘を祈ります。

水戸 直和

考査の準備をしている皆さんへ



学ぼうとしての幸せを思う

丸山 敦子



この夏、私はセーターを編んでいる。
サイズは100cm。送り先はアフガニスタン。

数年前、インターアクトの活動でアフガニスタン出身の虎山ニルファさん（ニルファ・コフィから帰化して改名）のお話を聞いた。彼女は恵まれた家庭に生まれたが、クーデターの勃発により自身も足に銃弾を受け、また家族とも離れざるを得ない辛い時期を過ごした。その後、15歳でアフガニスタンを脱出し、サウジアラビアで幼いころ別れた父との再会を果たし、来日。読み書きもできない状態から、

大学卒業、オーストラリア留学まで果たし、ダリ語、ペルシャ語、ウズベク語、英語、日本語の5カ国語を使いこなし、現在は、国際機関で通訳として活躍している。

アフガニスタンは、これまで混乱状態が続き、現在も大量の難民が発生している。テロ、麻薬の問題など、周辺国や国際社会全体に影響を及ぼしかねない問題が未解決のまま。食糧不足、自然災害に加えて、ソ連軍侵攻時代から現在に至るまで対人地雷が多く残されているため、内戦の終結の努力とともに地雷の処理が必要な現状を知ってほしいと訴えた。

その上で、彼女は学ぶことの大切さを語っていた。そして意欲さえあれば学び直しはいつからでも可能だと言っていたのが印象深い。彼女は日本に来るまで学校に通ったことがなかった。私たちにとって学校は当たり前のことだが、望んでも叶えられない人がいることを改めて考えさせられた時間だった。

「海の向こう 誰かが戦争していても 私は数学している不思議」高校生が詠んだ短歌の一つにそうあった。同世代を生きる若者が生死を分ける瞬間にあるとき、私たちが学校に通えている幸せを思う。そして、このままでいいのかという問いかけも聞こえてくるようだ。よくわかる。自分にできることは何か。

昨年、「アフガニスタンのストリートチルドレンに編み物作品を贈ろう」というボランティアを知った。アフガニスタンの北西部では5歳未満児の24%が栄養不良状態だという。冬の寒さは厳しく-10℃以下にもなる中、防寒着を買い求める経済的余裕もなく、命を落としてしまうこともある。食糧や教育の支援が求められるのはもちろんだが、暖かい衣類も多く必要とされている。昨年は5,000点以上が送られた。始めてみてわかったが、この活動にはいくつかの約束事がある。1) 糸はウール100%。2) 色は濃い色。3) 模様はシンプルなもの。4) 首回りは二重にする。5) 糸端は丁寧に処理せずにわかりやすく。汚れが目立つ色は避け、破れても補修しやすいようにするためであり、配達時にトラブルにならぬように目立つデザインや可愛い模様は不要ということだろう。例年、締め切りは10月頃であったらしいが、今年はコロナの影響で届けられない。来年の10月が最後の送付と聞いた。それまでに何枚作れるか。

ボランティアを「偽善」や「自己満足」と言う人がいる。確かに自己満足の面はあるかもしれない。しかしやらないよりやったほうがいいなら、意味はある。

森絵都の『月のふね』の最後に、小学二年の「智」が友人に宛てた手紙の一節がある。「(おばちゃんは、)きっとこの世には小さくても尊いものがあって、そういうものが助けてくれるのかもしれないねー」と言いました。ぼくは小さいけど尊いのですか。ぼくは尊いものですか。」友人を助けたいと思いながら、何をなすべきかを思い悩む主人公の言葉が胸を打つ。人を救うのはやはり人ではないか。要は「自分にできることをする」しかない。できる範囲でいい。身近な人のためにでも、顔も知らない誰かのためにでも。自分の中に小さく点る尊い灯を持ち続けていくことが、いつかどこかで誰かを温められると信じた。

今、目の前にあるセーターの袖に腕を通してくれる子が冬を乗り越えて無事に大人になり、自分の学びたいことが学べる未来を願っている。



1枚できました

帽子も作っています



(上部写真)
ワールドビジョンジャパンのHPから。
(下部写真)
筆者撮影。